

母子相互作用に関する Prospective Studies

- 平 山 宗 宏 (東京大学母子保健学教室)
南 部 春 生 (聖母会天使病院)
上 田 礼 子 (東大母子保健)
小 沢 道 子 (")
池 田 紀 子 (東大分院健康相談部)
中 川 礼 子 (")
入内島 明 美 (三楽病院)
唐 沢 陽 介 (")

最近では母子関係が母親と子どもとの相互作用による two way process によってなりたっていることが立証されつつあり、乳児の存在は母親行動の触発に大きな役割を果していることが認められてきており、さらに母子関係の形成には父親を含めた家族のあり方とも力動的に関係していることも考慮する必要がある。この点に関しては、小児にみられる被虐待症候群や failure to thrive などの問題はすでに母親の妊娠中から父親も含めて家族として潜在的問題をかかえていることも報告されており¹⁾ また妊娠分娩への夫の参加が親子関係の形成に影響を与えることも示唆されている²⁾。

このような背景からわれわれは、父子関係をも考慮しつつ親への指導、働きかけの効果、早期からの母子接触、リスクの高い親子の早期発見、およびハイリスク者に対する援助の方法等を実用的観点から検討したので、夫々の研究の概要を報告する。

研究の目的と経緯

母子相互作用に関しては、出生前から周産期、さらに乳児期を通じてたえず動機が存在するが、それぞれについて意義や効果を知るためには prospective に追跡的調査検討する必要がある。われわれは出生前からの母親としての適応状況、分娩時の夫の立会、母子の早期接触、育児指導の実施、等の意義を追跡的に検討するとともに、小児における家庭刺激の調査方法の検討、心理的に問題をもつ小児の親子接触欠落時間の検討を行ったので、これまで3年間のまとめをかねてここに

報告する。

母子相互作用の存在を疑う者はいないであろうが、個々の因果関係やある実験結果の意義の判断には、追跡的に経過を冷静に観察しなければならず、先入観にとらわれることのあってはならないのは当然である。このためにも prospective な研究の必要性が大きいと考えたのである。

研究結果のまとめ

母子相互作用に関するわれわれの研究から次のごとき結論を得て今後の保健指導上利用できることを認めた。

(1) 妊婦・産婦および乳・幼児の母親の各時期に母親の意識や小児の気質を検査する質問紙調査を行うことにより、親子関係についてのハイリスクを発見する試みを実施し、その発見上有用であった。産褥期のリスク者スクリーニング用質問紙、家庭刺激スクリーニング用質問紙はこれらの目的に実用的であり、産科、健診時に利用することがすすめられる。

(2) 夫の分娩への立会いは、立会いそのものによる効果よりも、立会いを望む父親の意識、姿勢の家庭づくりへのよい影響が示唆された。

(3) 周産期から母親に系統的に児との関わりを重視する指導をすること(見つめ、話しかけ、抱き上げ、授乳するなど)は、母親の育児安易度を高め、育児不安を減少せしめる効果をもとめた。また母児の早期接触(生後15分以内に児を裸のまま母親の胸腹部にうつ伏せ、その後乳頭吸嚙させる)はこれらの効果をさらに高めるものであることが認められた。助産関係者の協力によりこの

ことは実行可能である。

(4) 問題行動児，心身症児について人的環境，とくに母と子の接触欠落時間を面接の中から見出し，問題の理解，指導の指標として用いることに

より良好な結果が期待された。すなわち母と子の接触状態既往の調査は問題行動・症状の解決に有効であると考えられた。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



最近では母子関係が母親と子どもとの相互作用による two way process によってなりたっていることが立証されつつあり, 乳児の存在は母親行動の触発に大きな役割を果していることが認められてきており, さらに母子関係の形成には父親を含めた家族のあり方とも力動的に関係していることも考慮する必要がある。この点に関しては, 小児にみられる被虐待症候群や failure to thrive などの問題はすでに母親の妊娠中から父親も含めて家族として潜在的問題をかかえていることも報告されておりまた妊娠分娩への夫の参加が親子関係の形成に影響を与えることも示唆されている。

このような背景からわれわれは, 父子関係をも考慮しつつ親への指導, 働きかけの効果, 早期からの母子接触, リスクの高い親子の早期発見, およびハイリスク者に対する援助の方法等を実用的観点から検討したので, 夫々の研究の概要を報告する。